

戦地より家族に送られた楽譜

佐倉晴夫軍曹と増田清一大佐

大野正夫

神奈川県立小田原高校同期卒業の最後の同窓会が、傘寿(80歳)に予定されていた。コロナ禍ため2年遅れで、2022年5月に小田原駅に隣接するホールで開催された。400名の同期卒業生であったが、参加者は50数名であり、一抹の寂しさがあった。しかし、参加者には元気者が多くて和やかな会が進行していった。

会も終わり近づいた時に、DVDで「戦地より家族に送られた楽譜」の曲が映像とともに放映された。哀調のある良い歌だなと思いつつ視聴した。この同窓会の席では、小田高11期生傘寿記念集「檜の香」A4版164頁の冊子が配られた。

佐倉晴夫さんの歩んだ人生

帰路、車中で記念集を読んでいくと、佐倉久隆氏の投稿記事で、上記の会場で披露された歌のことが、「私のたからもの」というタイトルで書かれていた。佐倉久隆氏の父上が満洲の戦地、満洲・関東軍2632部隊に居た時に、作詩・作曲した楽譜の事柄が記述されていた。私は小学校の恩師である増田昭一先生の父、増田清一氏は2632部隊の部隊長であることを、自著、増田昭一の生涯「大地の伝言」(夢工房)のなかで書いた。あるいは「増田部隊」ではないかと思い、彼に手紙を書いた。しばらくして、彼からたくさんのコピーされた資料が届いた。母上が、大事に保管していた父上の遺品の中から、軍事郵便の検閲印に増田の押し印のあるものを見つけて、増田部隊に関係する写真、手紙と楽譜であった。



母上が、大事に保管していた父上の遺品の中から、軍事郵便の検閲印に増田の押し印のあるものを見つけて、増田部隊に関係する写真、手紙と楽譜であった。

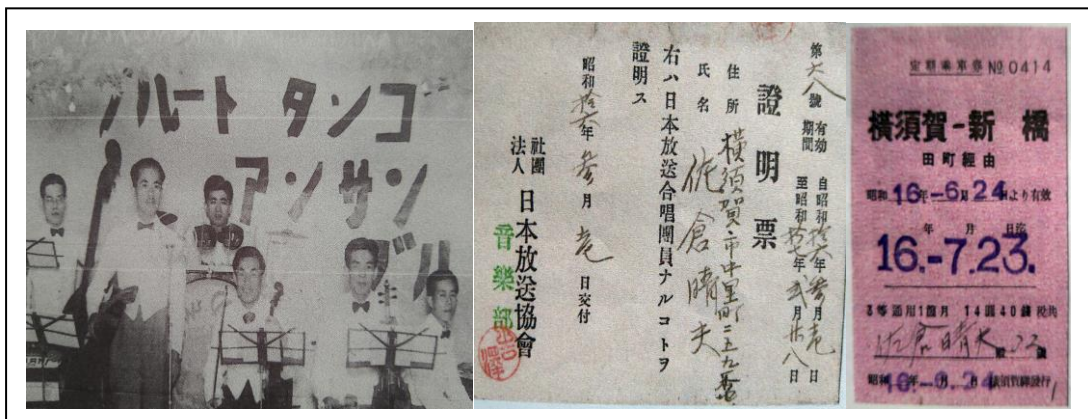
故佐倉晴夫氏は、旧制小田原中学を出て東洋音楽学校(現東京音楽大学)の提琴(バイオリン)科を卒業した。彼は、同郷小田原出身で、一年後輩の声楽科の山口敏子さんと結婚された。

戦地での佐倉晴夫さんと卒業アルバムで山口敏子さん

敏子さんの同期には、ラジオ歌謡「山小屋の灯」から、多くのヒットソングを作曲した米山正夫氏がいた。

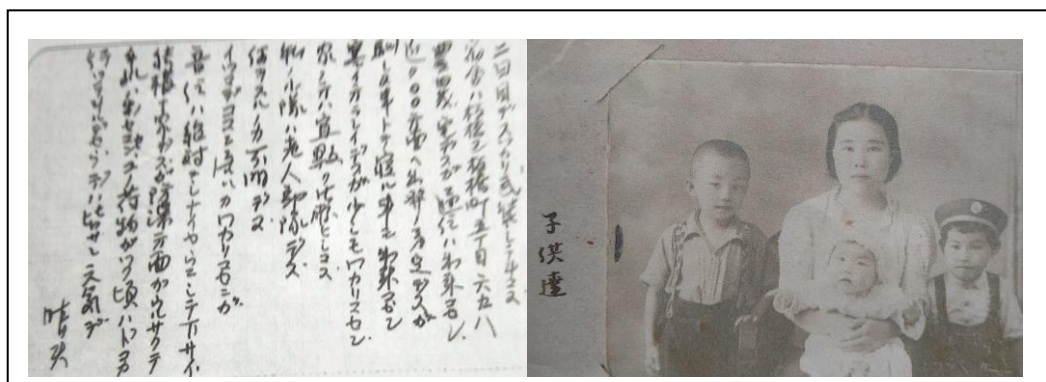
晴夫さんは、卒業後に横須賀の汐入小学校の音楽教師となった。子供達に音楽指導をしながら、楽団を組織してサークル活動も行っていった。

日本放送協会(現NHK)の合唱団員の団員でもあった。横須賀から新橋まで、通っていて召集されて入隊した時に、家族に持っていたもので、送り返された品物のなかにも、最後の定期券などが入っていた。



楽団 左より2人目(バイオリンを持つ)晴夫氏 NHK 合唱団証明票 最後の定期券

召集令状は、1941年、昭和16年7月、彼が32歳の時に来た。家族は子供達、7歳の長男、長女4歳、次男として久隆氏が1940年に生まれて1歳であった。



家族写真は、俊子さんの遺品のアルバム「回顧(陸軍恤兵部制作)」のなかに貼られている。このアルバムは出征兵士の家族に支給され、表紙には突撃兵士がデザインされている。そのアルバムに楽譜なども貼られていた。晴夫さんが出征の前に、俊子さんと3人の子供達を撮った写真である。この写真を持って晴夫さんは入隊したのであろう。

俊子さんが緊張していることが、写真からわかる。

後年、久隆氏が調べた厚生省の資料から、関東軍2632部隊は、急遽500名で編成されて訓練もなく民家に待機してから満洲に渡る秘密裡の出征であったことがわかった。定期入れのなかには、置き手紙が折って挟んであった。次のような文面である。

「二日目で、すっかり武装しています。宿舎は板橋区板橋町5丁目658、豊田茂宅ですが、通信ができません。近々00方面へ出発の予定です。慣れぬ事で寝る事もできず、寒い方らしいですが、少しもわかりません。家の方は宜しく願います。私の小隊は老人部隊です。

何をするのか不明です。いつまでここに居るのかわかりませんが、音信は絶対にしないようにして下さい。結構な家ですが、防諜方面がうるさくて、手紙がだせません。この荷物が着くころは、どこかへ行っているでしょう。では皆さん元気で。晴夫

満洲へ

晴夫さんは、ソ連国境に近いところに本部を置く関東軍 2632 部隊(野戦兵器補給部隊)に配属された。この部隊は 1941 年 8 月に、ソ連国境警備のため、新たに編成された部隊であった事が資料で分かった。新たな一個大隊編成は第二次世界大戦(太平洋戦争)開戦の5か月前であり、その頃からソ連侵攻を日本陸軍は予測していたのである。2632 部隊本部はハルピン(哈爾濱)と牡丹江の鉄道の間くらいにある佳木斯(ジャムス)の町に置かれていた。多くの満洲東部開拓団の入植は、ここから広がっていった。

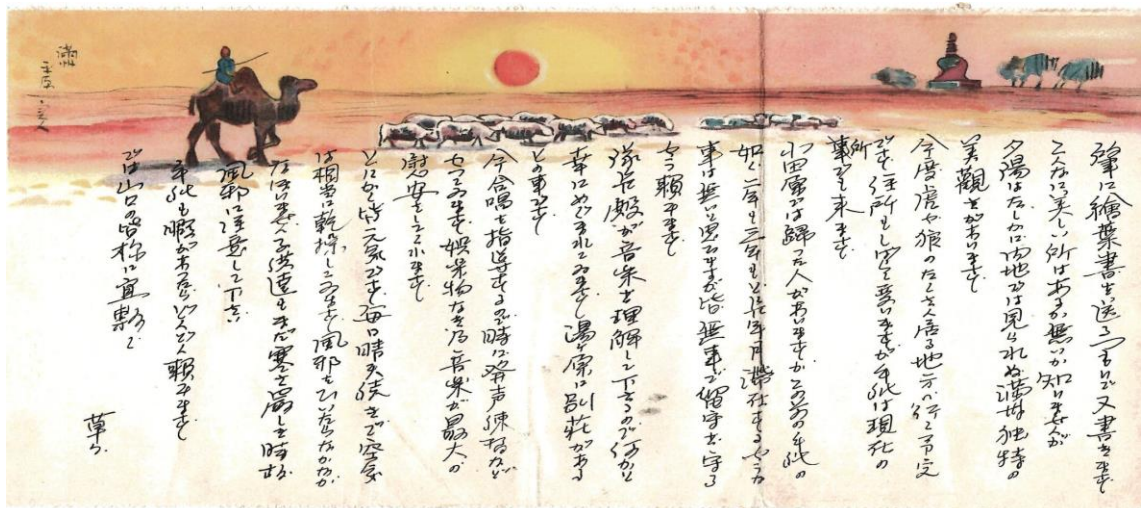


2632部隊は、戦闘部隊ではなく、兵站補給部隊で、戦時には戦闘もするが、平時は兵器の整備・保管管理と修理が主要業務である。晴夫氏が老人部隊を記述していることが理解できる。

晴夫氏はジャムス周辺に駐屯する戸田(中)隊に所属していた。満洲は、終戦、昭和 20 年 8 月までは、戦時の予兆がなく、部隊内で音楽サークルを作り、作詩・作曲して、戦友とともに歌を練習し慰労会で披露をする余裕があった。戦地から

妻、俊子さん宛てに 45通の軍事郵便が届いていた。

多くの手紙のなかで、「増田の押し印がある絵手紙があった」と、コピーが筆者に送られた。



真っ赤な夕陽が描かれている便箋である。文面は、「始めは、絵葉書を送るつもりでしたが、又絵手紙を書きますまで。こんなに美しい所があるか無いかは、知りませんが、夕陽は確かに内地では見られぬ独特な美観があります。今度は虎や狼がたくさん居る地方に行く予定です。住所も聞いていなのですが、現在の所でもきますので。

小田原に帰った人もおりますが、この前の手紙のごとく、2 年も 3 年ほど長年滞在するするやうな事は無いと思います。無事に留守を守るやう頼みます。隊長殿が音楽を理解して下さるので、何か

と幸に恵まれています。湯河原に別荘があるとのこと。今、合唱を指導するので、時々発声練習などやっています。娯楽なき所、音楽が最大の慰安としてくれています。

とにかく皆、元気です。毎日、ここは晴天続きで、空気は相当に乾燥しており、風邪をひいたら、なかなかおきません。子供達もまだ寒さ厳しい時節、風邪に注意下さい。手紙は暇があったら、どんどん頼みます。では山口の皆様によろしく。 早々」

この手紙から、軍隊内で、隊長の勧めで、合唱団をつくり歌の練習をしていたことがわかる。その一つが、渚の作詩・作曲となった。部隊のなかで慰労会があり、その時に、このような歌が歌われていたのであろう。妻、俊子さんは声楽学科を出ており、届いた楽譜をみてどのように思っただろうか。俊子さんも、ご自身で作詩・作曲して、戦地の晴夫さんに送ったいた。二人には、音楽を通じての絆があったのである。

日本陸軍というと、ピンタは当たり前、居室で上官、古年兵からのリンチがあり、辛い生活のことが多く語られているが、戦争がなかった満洲とは言え、増田部隊のような和やかな部隊があったことに安堵する。

しかし、久隆氏が幼稚園の頃に、ある日、母が祖母の胸にしがみついて泣いていた姿を覚えていると、久隆氏の手紙に書かれていた。1946年2月2日に「牡丹江の病院で病死」という通知が届いた時だった。



俊子さんは、戦時中から実家の小田原に住み、戦後、母校の小田原高等女学校(当時、城内高等学校)の音楽教師になり、3人の子供を女手一人で育てたが、ほとんど父のことを話すことはなかったと言う。「父のことを聞くと母を悲しませる」と子供心に思い、尋ねることもなく「仏壇の父の写真」を見つめていたそうである。俊子さんは、城内高校の合唱団の育成に情熱を燃やしたが、久隆氏が結婚する前年に、癌のため、52歳の若さで逝去した。

高校教師の俊子さん、

俊子さんの死後、父の遺品のなかのアルバムに、8つ楽譜の葉書をみた。久隆氏は小田原高校時代に音楽部に所属し音楽教師、松尾芳郎先生より、フルートの指導を受けて音符を読めたので、楽譜を見た時に、早速吹いてみた。その中で、2曲の歌詞、メロディーが気に入った。

渚 詞曲-佐倉晴夫

か-りみの ゆ-めに き-どろ-むい ぼ-つ
 とか-くみ こ-きに ひ-たつ-み
 お-ちい-な と-おきに ひ-たつ-み の-で
 いせの-が た-かき こ-ゆるぎの
 な-ごさあ さ-う し-ろが の-の
 ち-ぎに く-る つ-きの か-げ
 し-じまに の-ころ な-みのお-と

機会がある時に何度も吹いたと言う。そのなかでも、この「渚」の曲が好きであった。

1. 仮寝の夢に まどろむは
 思い出遠き ふるさとの磯の
 香たかき こゆるぎの
 千々にくだる 月の影
2. 遠く岬に 二つ三つ
 漁火波に ただよいて
 渚を洗う 白銀の
 静寂に残る 浪の音

同窓会で流された「渚」の楽曲は、Youtube URL で聴ける。

<https://www.youtube.com/watch?v=69Gh7yJs4Ks>

原曲を東京音楽大学の有馬礼子教授の指導で編曲し、卒業生が歌っている。バイオリン、チェロ、フルート、ビオラの調べに。故郷、小田原の磯によせる波の動画を背景で歌われている。もう1曲は、子供達を想う「遠 足」であった。

この「渚」の曲が世に出たのは偶然であった。ある日、読売新聞と角川書店の共同企画で戦後41年目の特別企画「昭和の遺書」の原稿の公募があることを知った。戦地から届いたこれらの曲を眠らせて置くのは惜しいと思い、久隆氏は投稿した。全国から、約900名の応募があり、373点が角川書店発行「昭和の遺書」に掲載された。幾編かが、読売新聞にも掲載された。久隆氏の原稿は8月15日の最終回に掲載された。その後、日本テレビのドキュメント番組として30分間放映された。この番組は、今でも下記のURLで視聴できる。ネットに下記の文面を入力すると25分間ドキュメントで視聴できる。

「昭和の遺書・よみがえった楽譜」 (NNNドキュメント'86)

この番組では、久隆氏の父親捜しの足跡を、日本テレビのスタッフが記録していった。横須賀の勤務先の汐入小学校の同僚であった方々と会い懇談したが、晴夫氏の出征の記憶がなかった。出征時に旗を振って送り出すようなことは、この頃になると無く、学校に出て来なくなって、[同僚の出征に気がつく].と言う時代になっていた。

久隆氏は、2632部隊に居た方とも会っているが、父を知る方とは面談できなかった。ただ、2632部隊は戦わずに終戦を迎えて、多くの兵士はシベリアに抑留されたことがわかった。晴夫氏は終戦時には何かの理由で、疫病に掛かり牡丹江の陸軍病院に入っていたと推測される。当時、満洲のこの地域では、幾種かの伝染病、特にシラミが媒介する発疹チフスが蔓延していた。満洲に渡った開拓団の家族も疫病で亡くなる者が多かった。「1946年2月2日、牡丹江陸軍病院」で病死と通知されているが、終戦時に疫病になり衰弱死されたのではなかろうか。

増田清一大佐

久隆氏からたくさん資料が届いた後、2か月ほど経って、添付ファイルで、「増田清一隊長と思われる写真をアルバムから見つけた」と写真が届いた。自著、「大地の伝言」に挿入されている増田清一部隊長の顔写真と一致すると、書かれており、届いた写真では、増田清一部隊長は中央で帽子をかぶっている。



晴夫氏は、写真の右から 3 人目と記述されていた。慰労会の時の写真と思われる。兵士の皆さんが持っている板のようなものには、テグス糸が付いており、足元に色々な人形がある。操り人形の芝居の後での記念撮影であろう。この写真は、部隊の写真班員が撮影して、皆に配布したものを、絵手紙と一緒に同封され、俊子さんに届いていた。



ここで注目するのは、この部隊の人間関係である。2632 部隊は戦闘部隊ではなく、兵器、砲弾の管理、修理、保存をする部隊である。戦時でも戦闘の後方部隊である。

そこで兵士には中年と思われる方が多く写真に写っている。増田部隊長は、写真の中央におり、「大地の伝言」に挿入した増田清一部隊長の顔写真と一致する(左写真)。

2632 部隊の中に合唱団を作り、しかも合唱曲「渚」のような歌を歌っていたことは興味深い。兵士達は軍歌ばかりを歌っていたのではなかった。

この写真のもう一つ、興味があるのは、兵士が主役で、中央に隊長は後ろに立っていることと、二人の士官が両方の袖にいる。部隊の中では、強い上下関係もなく和やかな仲間意識であったように思われる。

増田清一大佐は支那事変では、長く砲兵部隊を指揮していた。一方、旧制中学校の教練教師を二期、4 年間勤めて、楽しかったと家族に語っていた。太平洋戦争直前には、アッツ島への部隊を潜水艦で送る任務を海軍と作戦を練って行い成功した。しかしアッツ島は玉砕した。最後の突撃をした山崎保代中佐・大隊長とは士官学校で同期だった。

増田清一大佐は、この任務を終えて満洲に編成された 2632 部隊を指揮した。ソ連軍侵攻を予期して編成された部隊であるが、しかし戦局が厳しくなり、増田清一大佐は 1945 年 3 月に、ソ連軍が国境を越えて侵攻し牡丹江を目指して来るとされる最前線に、新たに編成された 2633 部隊を指揮するため、少将に昇格し移動した。彼は牡丹江防衛線構築作戦を練り、牡丹江で終戦となったが、自決せず捕虜になった。彼の防衛作戦は、ソ連戦車隊が「動く地雷」と

恐れた特攻の爆雷作戦であった。防衛ラインをいくつか築き、ソ連軍の牡丹江市侵攻は、3日間遅れた。そのために周辺地域を含めて、約6万人の日本人居留民は、列車とトラックで。ほぼ無事に朝鮮へ避難できた。牡丹江は、新京や奉天の戦後の日本人の悲劇が起きなかった。

増田少将の妻は、夫が捕虜になった報告を聞いて「自決してほしい」とつぶやいたと言う。彼は「部隊長が自決すれば、部隊が乱れえる」と思ったのであろう。甘んじてシベリア抑留生活をした。シベリア抑留では、幹部軍人は一般兵士とは別の生活をしたそうだが、彼は、希望して兵士と共に同じ部屋で生活をした。シベリアから持ちかえったのは、腕時計と金殊勲章・将官章だけだった。勲章などは、ソ連兵は何かのバッチと思ったのであろう。52歳でシベリア抑留から帰国して職には就かず、小学校教師、増田昭一先生の給与だけで、貧素な生活して56歳で癌で逝去した。

多くの軍人幹部は第二の人生を歩んだが、増田清一少将は、多くを語らず日記を書くことが日課だった。興味深いのは、野菜やコメなど買ったものを詳細に記述していた。兵站の重要性を思っていることではないだろうか。戦後、日本では餓死者は、ほとんどなかった。

増田清一氏は、佐倉晴夫氏と同じ旧制小田原中学(現小田原高校)を出た。増田清一氏は「旧制高校に行きたい！」と希望を抱いた秀才であったが、軍人の父親から、「軍人の子は士官学校へ」と言われて、軍人の道を歩んだと増田昭一先生は言われた。中国の戦線で戦死者を出さないことを、いつも考えて作戦を練り、前線部隊長で金殊勲賞をもらった。部下の日本兵士と雇いの満人(中国人)と区別せず、満人の子供が疫病になった時に、直通軍用電話で、医大に連絡を取り、ワクチンがあることを知って、医大に子供をゆかせて助かったという話を、増田先生から聞いた。昭和の軍人は悪く書かれることが多いが、誠実な軍人もいた。

中学の後輩・先輩である佐倉晴夫軍曹と増田清一大佐が、一つの輪になった一枚の写真のなかにいることは、ほっとさせる。絵手紙のなかで、「隊長殿は湯河原に別荘がある」と書かれており、二人は交流があったことも伺える。上記のDVDの最後の場面で、久隆氏は、東京音楽大学を訪問しており、大学のスタッフや卒業生が協力して、晴夫氏の楽譜を編曲して合唱曲とし、その演奏がこの番組で収録されている。戦地に送られ、故郷を想う歌として、また昭和の遺書として、広くの人達に歌われることを望む。